

作成日	2019年7月4日
学科・専攻名	国文学科

教育課程・学習成果

1. 教育課程編成・実施の方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成していますか。

【現状説明】

国文学科においては、「教育課程編成・実施の方針」に基づき、1年次の国文学・国語学に関する基礎的知識の獲得から、4年次における卒業論文作成へと順を追って専門性を高めることができるよう、各科目の連携・関連を図り、体系的な教育課程を編成し実施している。

1年次には古典文法の学び直しから始まり（入門演習A）、国文学・国語学に関する基礎知識を身に付け（国文学基礎講座・国語史・国文学史など）、さらにくずし字解読の技能を修得する（入門演習B）ことによって、次年度以降に必要な基礎学力を養う。さらに1・2年次を通して発展的授業（各時代・分野別の講読）を履修することにより多様な知識を深め、研究の方法論を学ぶとともに、2年次の基礎演習においては調査能力を身に付ける。また、京都の歴史・風土に触れるための実地学習を行い、近隣に史跡や社寺が多い本学の立地を生かした学びを実施している。3年次には、特殊講義などで専門的知識をさらに高めると同時に、演習科目を国文学の各時代及び国語学・漢文学の分野の中から2つ選択し、主体的調査・批判能力、合理的思考力を養う。4年次では学びの集大成として卒業論文を作成し、一段と高い専門的知識と技能を身に付け、課題発見・解決能力を養う。その結果、生涯にわたって学び続ける能力の確立を目指している。

カリキュラムは国語史・国文学史・講読・特殊講義などが相互の関連を持ちながら体系的に編成されており、上代国文学から近代国文学、国語学、漢文学・民俗学まで幅広い分野の講義科目が開設されている。さらに、演習科目も入門演習から基礎演習・演習Ⅰ・演習Ⅱと4年間続けて履修することで、アクティブラーニング・少人数での教育を実施している。

国文学科の教育目標と、設置されている授業科目との関係については、『学習の手引』（2019年度より大学ホームページで公開）の中で、カリキュラムマップや履修モデル等を通じて、学生に十分に説明されている。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

2. 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための措置を講じていますか。

【現状説明】

国文学科では、教育課程の編成・実施方針に基づき、体系的な教育課程を編成し実施している。1年次では、国語学・国文学全般にわたる基礎的な科目を学ぶ。国文学基礎講座では、国文学研究の基礎的事柄を学ぶとともに、各時代・分野別講義も行われるため、早い時期に国文学研究の各時代・分野全体にわたって触れ、今後4年間の学びに生かすことができる。また、入門演習では、前期は古典文法の学び直しを行い、後期はくずし字解読の技能を修得するなど、今後の学習がより確かなものとなるように配慮している。1・2年次においては、講読という国文学・国語学の発展的講義が開かれている。また、基礎演習は各セメスターで1つずつ、前・後期でそれぞれ時代・分野が異なる2つの演習に参加し、実際に自らが調査・発表することで自主的学習能力の向上を図っている。3年次の演習Ⅰは1年間通して2つの演習を履修することで、専門的・多角的視野の育成を図っており、課題発見能力・課題解決能力の獲得を目指している。4年次ではそれまでの学習を総合して、指導教員の個別指導を受けつつ、卒業研究の完成を目指す体系的な編成となっている。全学年に

において少人数演習を必修科目として配置し、少人数教育の充実を図っている。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

現状説明に記載の通り、教育課程の編成・実施方針に基づいた学士課程に相応しい教育内容を提供している。1年次の導入科目である「入門演習」は能力別クラス分けを行うことで、大学入学までの学習の確認と基礎的知識・技能の授与を効果的に行っている。2年次の「基礎演習」、3年次の「演習Ⅰ」は、希望する学生数が年度毎に変化するため、前年度からガイダンス及び希望予備調査・本調査を行い、その結果を学科会議で検討し、開講コマ数の変更も含めて、学生の希望を尊重する形で最善の調整を行っている。

2018年度学生生活実態調査結果で、比較的ポイントが高かったのは、「専門科目の授業内容が充実している」の0.91（全学で3番目に高い数値。大学平均0.79）、「ものごとを論理的、体系的に考えること」の0.68（全学で最も高い数値。大学平均0.59）、「自分の意見や考え方をわかりやすく表現すること」の0.9（全学で2番目に高い数値。大学平均0.78）であった。以上の3点においては、学科の教育内容にかかわる措置が、一定の成果を上げているものとする。

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

2018年度学生生活実態調査結果によると、「体験学習、グループディスカッション、ディベート、グループワーク等のアクティブラーニングによる授業が多い」のポイントが0.15（大学平均0.26）であり、やや低い数値となっている。

国文学科でも、演習科目などの少人数授業においては、発表やディスカッションを実施して、学生の主体的な学びを重視している。一方、演習以外の科目においては、受講者人数が多い科目もあり、ディベートやグループワークなどを円滑に運営することが困難である場合も多い。また、講義の特性上、ディベートやグループワークなどを必要としないという場合もある。しかし、アクティブラーニングは、「グループディスカッション、ディベート、グループワーク」のみに限定されるものではなく、シラバスの「京女AL」にもあるように、「振り返り」「授業時間外学習」「フィールドワーク」なども含まれている。したがって、国文学科でも、数値が示す以上に、アクティブラーニングを実施しているといえると考えられる。例えば、2年次の基礎演習では、国文学や国語学にゆかりのある場所を訪れるフィールドワークも実施している。また、演習以外の科目においても、講義内容に関連した提出カードなどを課し、授業中または授業後に提出させ、それに対する講評を行うことなどは実施している（「振り返り」「授業時間外学習」）。演習以外の科目においては、今後も、このような形でのアクティブラーニングを充実させていく。以上に加えて、狂言など、日本古典芸能について学ぶ科目では、座学で学んだことを体感する実技体験なども取り入れ、さらにまたその体験を座学に生かすといった形で、アクティブラーニングを通して学習を深める施策を講じていきたいと考えている。

3.学生の学修成果を把握し、教育課程及びその内容、方法の適切性についての点検・評価を行っていますか。また、その結果をもとに教育の質向上に向けた取り組みを行っていますか。

【現状説明】

学生の学修成果については、講義科目や演習科目における発表・レポート・時間外学習・定期試験などの到達度により把握するとともに、京女ポータルポートフォリオで確認できる成績やGPAによって把握している。4年間の集大成である卒業論文については、学科で統一した採点基準を設け、各学生に対し2名の教員（内1名は演習Ⅱの指導教員）による口頭試問を経た上で、学科全体の判定会議において各学生の卒業論文の成績を出し、卒業時の学修成果を把握している。

国文学科の教育課程及びその内容、方法の適切性については、学科会議において、主としてカリキュラム編成、教育方法、成績評価の観点から、教育成果資料（授業評価アンケート、卒業時アンケート、学生生活実態調査）などを踏まえて検証している。現行のカリキュラム編成が適切であることを確認するとともに、教育効果を一層上げるために更なる検証を積み重ねていくことで一致している。また、授業評価アンケート結果に対する「授業評価所見」を各教員が公表し、必要に応じて改善に取り組んでいる。

教育方法については、2019年4月に向けて入門演習のテキストの内容を検証し、より適切で充実した内容となるように

改訂をおこなった。加えて、それらの資料を基に、学生の調査・研究および表現・発表能力のより高いレベルでの育成を図るための方法を、種々の観点から検討していくこととした。また、毎年度、次年度時間割を作成する際に、各科目の受講者数、カリキュラムの妥当性、担当者の選定などを学科会議で検証している。

その他の改善に結びつける取り組みとしては、全学のFD講演会、FD交流会（事例発表）への参加などがあげられる。なお、2018年度後期には、国文学科の教員1名が、FD交流会（事例発表）において、授業における京女ポータル活用法の事例発表を行った。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

入門演習のテキストを、より充実した形にするなどの改善を加えた。

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

教員・教員組織、FD

1. 教員組織の編成(募集・採用・昇任等)にあたって、職位構成および年齢構成の偏りに配慮した編成をおこなっていますか。また、カリキュラムに基づく教員組織となっていますか。

【現状説明】

国文学科の2018年度における教員数は13名、年齢構成は、60代2名、50代5名、40代3名、30代3名で、男女比は男性8/女性5、教授9名、准教授1名、講師3名という構成である。外国人教員は所属していない。

学科としてのカリキュラム・ポリシーを踏まえ、国文学領域、国語学領域、漢文学領域で構成される教育課程・開講科目に対し、上代文学1名、中古文学2名、中世文学2名、近世文学2名、近代文学2名、漢文学1名、国語学2名、仏教1名というように幅広い分野・時代に亘る教員を配置しており、担当科目と各研究分野が整合するものとなっている。教員組織とそれぞれの研究分野については、「大学案内」や大学ホームページに公表されている。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入

30代の教員が増え、年齢構成としてバランスが取れた形になった。また、2007年度以来1名であった中古文学の教員が、2018年度より2名となり、当該分野での学生たちの学びを、さらに充実させることができた。

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

50代の教員が増えてきたことを鑑み、今後の人事においては、職位や年齢のバランスを考えて検討を行う必要がある。

2. 学科・専攻独自のFD活動を実施し、教員の資質向上に取り組んでいますか。

【現状説明】

教育活動（授業の分かりやすさ、履修指導、学生の意見のフィードバック等）に対する学生の満足度については、「授業評価アンケート」や「学生生活実態調査」を基に、学科内FD活動として学科会議で検証している。1年次対象の「入門演習」、2年次対象の「基礎演習」の授業内容・方法、成績評価の方法について毎年度末、学科会議にて協議している。また、必修科目を中心に、学生の履修状況や学修状況などについて、随時、学科会議で情報共有を行い、指導が必要な学生に対して迅速に対応できるような体制を整えている。

また、1年次対象の「入門演習」については、国文学科の教員同士で検討を重ね、古典文法のテキスト（「入門演習A」）、古典文法の復習のための教材（「入門演習A」）、くずし字解読の技能習得のための教材（「入門演習B」）を作成し、教材の開発と改訂につとめている。「学科・専攻のFDの取り組み」の経費として大学から配分される予算を利用して、くずし字解読に関する市販のテキストなども複数購入し、教材の開発と改訂の際の参考にしている（「入門演習B」）。

より充実した教育を行うための教員の研究活動については、教員業績データベースを用いて、大学のホームページで公開している。また、研究の活性化を図るべく、京都女子大学国文学会の機関誌『女子大國文』を年2回刊行しており、所属教員に投稿を呼びかけている。投稿論文については、所属教員から選ばれた委員による編集委員会にて厳正に審査し、審査結果を編集会議にて協議し、採否を決定している。2016年度からは「京都女子大学教員業績評価に関する規程」に基づき、前年度業績の評価を行い、学部長・学長による評価を受けて改善活動等に取り組んでいる。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

2018年度後期授業評価アンケート結果によると、ほとんどの項目が、大学平均を上回っている。特に、「授業の説明のわかりやすさ」の項目について、前年度よりもアップしており、学科のFD活動は一定の成果を上げているといえる。

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

以上

内部評価委員会からの評価結果（内部評価結果レポート）

一般的なコメント（総評）
問題点が的確に認識され、改善に向けた活動が推進されていると評価できます。
改善勧告コメント（具体的な改善の指示）
<ul style="list-style-type: none"> ・「教育課程・学習成果」の3に、「学生の学修成果」の「把握」についての観点を盛り込んでください。 ・「教員・教員組織、FD」の2の【課題および改善施策】の記述内容は、「学科・専攻独自のFD活動を実施し、教員の資質向上に取り組んでいますか」という点検項目からずれてしまっているように思われます。項目と整合する形の記述に修正してください。

内部評価結果レポートの改善勧告コメントに対する点検単位の意見

意見
<ul style="list-style-type: none"> ・「教育課程・学習成果」の3の【現状説明】に加筆しました。 ・「教員・教員組織、FD」の2の【課題および改善施策】については、7月4日作成版では、2018年度後期の「授業アンケート」結果に基づき、学科のFD活動における今後の課題として、学科で情報共有した内容を記しました。それに対し、このたび、「点検項目からずれてしまっている」というご指摘をいただきました。どの点が「ずれてしまっている」のかについての具体的なお指摘はありませんでしたが、おそらく、「学科独自」の「FD活動」や「教員の資質向上」という観点が盛り込まれていないということ、を、「ずれてしまっている」と判断されたものと推測しました。 <p>「学科独自」の「FD活動」や「教員の資質向上」という観点では、特に、【課題および改善施策】はないと考えますので、「特筆すべき事項なし」と改訂しました。また、このたび、再検討した結果、「学科独自」の「FD活動」や「教員の資質向上」に関わる活動として、「教材開発」も実施していることを、「教員・教員組織、FD」の2の【現状説明】に加筆した方がよいと判断しましたので、加筆しました。</p>